

## ●身近に植物を観察

高鍋防災ダム（一九六八・昭和四十三年完成）の建設工事で、土砂をはぎ取った跡に、周辺の山林の湧（ゆう）水がたまって湿原ができた。それが「高鍋湿原」である。ハッチョウトンボ、サギソウの自生地として知られる。

県道高鍋・高岡線の宮崎交通新山バス停の近くから湿原まで道路が通じ、車でも行ける。湿原はダムを挟んで東西二カ所に分かれているが、八六（昭和六十一）年からのダム改修工事で、つり橋（とんぼの橋）が架かり、同時に観賞路、フェンスなども整備され、小規模ながら、身近に植物を観察することができる自然観察園となっている。

注目はハッチョウトンボ。体長二<sup>センチ</sup>。わが国で最小のトンボで、絶滅が危ぐされている貴重種。同湿原では七七（同五十二）年に初めて観察された。その後、湿原の荒廃が進み、絶滅も

心配されたが、整備保存が進み、よみがえった。観察期は四―十月。このほか、トンボ類ではハラビロトンボ、チョウトンボなど十二科六十七種が確認されている。

植物ではサギソウ。茎の長さ約十五―四十<sup>センチ</sup>。その先に名前の由来となったサギが飛んでいる姿にそっくりな白い花をつける。小さくてかわいい姿は同湿原の人気ナンバーワン。夏になると観賞者の目を惹きつける。

このほか自生植物は多彩。主なものは四、五月のサワオグルマ、ヘビノボラス、ヒメハギ、夏のモウセンゴケ、ヒメガマ、カザグルマ、秋のヒメノボタン、ミズギボウシ、サワヒヨドリ、リンドウなど。確認されているもので二百九十九種八十五科に上る。

湿原の公開期間は三月下旬から十月まで。そのほかは生育環境を守るため、閉鎖される。こ

の間はボランティアの人たちが雑草刈りなどを行い、湿原の富栄養化防止に努めている。

現在、年間四、五万人が訪れる。整備される以前は盗掘などの心配から、湿原の場所そのものを公表していなかった。公園化したのは九八（平成十）年からで、その時にボランティア十五人で湿原ボランティア（岩村進会長）を結成、湿原の保存のほか、観察期にはガイドも勤め、湿原の大切さ、学術的な価値などを訴えている。

県道からの湿原入り口には高鍋温泉「めいりんの湯」がある。町では現在、高鍋湿原周辺地域で「四季彩のむら構想」を立て、福祉施設の設置も含めた整備を進めている。

堀内文夫



観察路も完備した高鍋湿原。豊かな自然が残る